



TITLE:

岡山県大佐町に生息する野生ニホンザルの分布および個体群構成の調査(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

小山, 高正; 安藤, 明人; 渡辺, 義雄

CITATION:

小山, 高正 ...[et al]. 岡山県大佐町に生息する野生ニホンザルの分布および個体群構成の調査(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1983, 13: 40-41

ISSUE DATE:

1983-10-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163225>

RIGHT:

2. 研究会

従来研究会は「課題研究」に対応したものが多かったが、昭和56年度は「計画研究」が新設の企画であるため、「計画研究」に対応した企画は少なかった。今後、「計画研究」に対応した研究会の企画があると予想される。昭和57年度採択された研究会は以下の5件である。

1. 霊長類の生殖リズムと中枢機序
2. 霊長類の比較社会学・比較生態学
3. ニホンザルの食物および採食の生態学
4. 第12回ホミニゼーション研究会
5. ニホンザルの奇形発生状況と原因究明

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

岡山県大佐町に生息する野生ニホンザルの分布
および個体群構成の調査

小山高正（お茶の水女子大・家政）

安藤明人（阪大・人間科学）

渡辺義雄（阪大・人間科学）

岡山県阿哲郡大佐町及びその周辺に生息する野生ニホンザルの実態を把握するために調査を行った。周辺域では、1980年までに聞き込みなどによって少なくとも4群の存在が推定されていた。本年度は大佐町惣ヶ原及び新殿を中心に調査を行った。

惣ヶ原付近ではつづら畑を中心に6日間、新殿付近では勝山町富原を中心に23日間ザルの群れを観察できた。その結果、つづら畑群（Ts群）については遊動域の広さが約8km²と推定され、また群れの個体数は最高60頭を数えて、成体雄6頭、成体雌17頭、未成体16頭の計39頭が確認できた。

富原群（To群）については遊動域の広さは約15km²と推定され、群れの個体数は最高37頭を数えて成体雄6頭、成体雌15頭、未成体15頭が確認できた。To群は推定で50頭はいると思われる。また、To群調査中にTo群と行動域の重複する新殿群（N群）の個体数を数えることができた。N群は成体雄5頭、成体雌18頭、未成体46頭を数えることができ、行動域の広さは約7km²と推定された。

以上から、個体密度などについて以上の3群と餌付け当初の勝山群とを比較すると、To群が他の群れに比べて個体密度の低いことが明らかになった。その原因の一つとして、To群の行動域内では他の地域に比べてスギ、ヒノキの植林が多いことが考えられる。

大佐町及びその周辺には、上記3群の他にTs群の北東の2群、N群の南の1群の存在が確認され、あわせて6群のいることが明らかになった。そして、これらの群れのいくつかは人工林の拡大、ダムや自動車道の建設などの開発事業の進行によってその行動域に変化がみられ、それとともにサ

ルによる農作物の被害が増加していることが明らかになった。今後、これらの開発事業とサルの棲める生態系の確保、そして農作物への被害の防止等の問題を調整し、調和のとれた地域開発への構想を早急にたてる必要性が感じられた。

木曽川左岸流域に棲息する野性ニホンザルの猿害防止についての実験的研究

泉 山 茂 之 (京大・霊長研)

全国各地で猿害が問題化し、害獣としての駆除が著しく増加し、保存上重大な問題となっている。このため、人間とサルとの共存をはかるべく、サルが耕地を回避するよう学習させることが必要である。このため長野県上松町において、煙火システムによる猿害阻止実験を行なった。

耕地及び周辺の林内に煙火システムを設置し、電流による遠隔点火により爆発させるものとし、火薬量 6.5 g の煙火 5-10 発を連続爆発することができ、群内のあちこちで爆発するようにした。上松町全体で 38 系列、煙火 277 個を設置し、線延長は 8,429 m であった。また、この研究は 1981 年 8 月から実施されている。

サルは、K, T, S, M の 4 群で、1982 年 4 月まで 11, 16, 6, 2 回の強化を行なった。4 月以降は感応式を併用し、他の強化方法も含めると 12 月までに 15, 0, 13, 2 回の強化を行なったことになる。

T 群の東野の耕地への出現は、1980 年と 1981 年とではほとんど差が見られなかったが、クワ被害は前年と比較にならぬほど減少した。とくに前年度全滅状態にあった東北側の広いクワ畑は、ほとんど被害がなかった。しかし、強化を受けなかった南側のクワ畑には、3 月に入ってサルが侵入して大きな被害を与えた。

また K 群は、2 日間に計 3 回の強化を受けた後、実に 52 日間全く洞の耕地に接近しなかった。猿害の最盛期でのこの空白は、明らかに耕地回避が行なわれたと判断できる。

以上のように、耕地回避が習得され、実験開始後、農業経営上問題となるほどの被害は生じておらず、1982 年度イネの被害は全くなかった。

今後の課題としては、さらにシステムに改良を加えること、両群の反応の違いをみてわかるように、サルは複雑であり、いくつかの駆逐方法を

併用することが好ましいと考える。

木曽川左岸流域に生息するニホンザル自然群を対象としたサルへのインパクトの研究

田 中 進

木曽川左岸の上松町と大桑村に生息する野生ニホンザルは、近年、耕地に出現し、野荒しをするようになった(川村・田中・泉山, 1983)。以前はなかった猿害が生起するに至った要因は種々考えられるが、一般的には、奥山の大規模一斉造林によって、生息地の環境悪化が進み、人里に出現するようになったといわれている。本研究地である木曽研究林においては、おおむね次の点がサルに影響を与え、猿害を生ずるに至った要因として考えられる。

1. 農業従事者の構成変化と省力化によって、耕地へ出現したサルへの対抗力が著しく低下した。また、農山村の過疎化、人的構成の変化、山の利用価値の低下によって、人が山へ入る機会が減少した。

2. かつて薪炭林として利用していた里山は、その利用価値の低下とともに放置され、かわってサルにとって食物植物が豊富であるため、サルの重要な利用地域になった。また、里山の小規模伐採がサルの遊動に影響を与えた。

3. 狩猟の対象獣でなくなったサルは、有害鳥獣駆除による狩猟を除くと狩猟圧を受けなくなった。

木曽では、サルにとっての自然環境に大きな変化はみられず、人的環境の変化が猿害をひき起こした重要な要因と考えられる。

課 題 2

志賀高原地域におけるサルの主要食物植物の季節変化

渡 辺 隆 一 (信州大・志賀研)

1982 年の 5 月より 11 月まで、志賀高原地域におけるサルの主要食物(ササ類、コシアブラ、サクラ類)の分布と植物季節について調査した。

ササ類の中でもサルの食料として重要なものはチシマザサである。本種は標高 1000 m 以上の地